

◆ 子宮内膜症および子宮筋腫と早期死亡のリスク：前向きコホート研究

Endometriosis and uterine fibroids and risk of premature mortality : prospective cohort study.

Wang YX et al

BMJ 387 : e078797, 2024

背景 子宮内膜症と子宮筋腫は慢性疾患の長期リスクが高いことがいわれているが、早期死亡リスク(70歳未満での死亡)に及ぼす影響は不明である。

目的 子宮内膜症や子宮筋腫が女性の早期死亡のリスクに及ぼす影響の前向きコホート研究。

方法 米国の「Nurses' Health Study II」(1989年開始のコホート研究)に登録された25～42歳の女性110,091名が対象で、2019年までの間2年ごとに行われたアンケート調査をもとに解析した。腹腔鏡下で子宮内膜症、超音波や子宮摘出術によって子宮筋腫と確認された女性が対象で、心血管系疾患やがんの診断歴のある女性は除外された。

結果 子宮内膜症では全死因早期死亡のリスクが増加

し(HR 1.19, 95% CI 1.09-1.30)、主に老衰および原因不明の疾患、非がん性呼吸器疾患、神経系および感覚系の疾患、婦人科悪性腫瘍(HR 2.76, 95% CI 1.79-4.26)による死亡リスクが高かった。子宮筋腫は全死因早期死亡とは関連がなかったが、婦人科悪性腫瘍(HR 2.32, 95% CI 1.59-3.40)による死亡リスクの増加と関連していた。

結論 子宮内膜症や子宮筋腫の既往のある女性は、生殖可能年齢を超えて70歳未満で早期死亡する長期的リスクが高くなる可能性があり、婦人科がんによる死亡のリスク増加との関連、また子宮内膜症はがん以外の死亡のリスク増加との関連の可能性がある。

(大阪公立大学大学院医学研究科女性病態医学 安井智代 抄)

◆ 早産期の前期破水症例(pPROM)に対する tocolysis と5年後のアウトカム：集団ベースのコホート研究

Tocolysis after preterm prelabor rupture of membranes and 5-year outcomes : a population-based cohort study.

Lorthe E et al

Am J Obstet Gynecol 230 : 570.e1-570.e18, 2024

背景 早産期の前期破水症例(preterm prelabor rupture of membranes ; pPROM)に対する tocolysis は依然として議論の多い治療法である。以前の研究で tocolysis は短期予後には関係しないことが示された。早産で生まれた学童期の子どもたちの神経発達予後に対する tocolysis の影響についての評価は現時点ではない。

目的 pPROM に対する tocolysis と5.5歳時の神経学的発達予後との関連を調べる。

研究デザイン 2011年に行われた早産に関する前向き集団ベースのコホート研究(EPIPAGE-2研究)のデータを使用した。24～32週までに破水し、破水時に胎児が生存しており24～34週の間に分娩に至った単胎症例で、5.5歳時に児の評価が可能であった症例を対象とした。曝露因子は tocolysis の有無である。主要アウトカムは5.5歳時に中等度～重度の神経発達障害がなく生存していることで、副次的アウトカムは神経発達障害、脳性麻痺、総合

知能指数、発達性協調運動障害、行動的問題とした。

結果 803人の妊婦のうち596人(73.4%)に tocolysis が行われていた。5.5年後の追跡調査にて tocolysis 群と非 tocolysis 群では、それぞれ82.7%と82.5%が中等度～重度の神経発達障害がなく生存しており、52.7%と51.1%に神経発達障害を認めなかった。Tocolysis の有無と、中等度～重度の神経発達障害生存(オッズ比0.93, 95%信頼区間0.55-1.60)、神経発達障害なく生存(オッズ比1.02, 95%信頼区間0.65-1.61)、そしてその他のアウトカムとの関連は認められなかった。

結論 pPROM 後に tocolysis を行った群と行わなかった群で、5.5歳時点での神経発達に差は認めなかった。現時点では tocolysis について短期的ベネフィットも長期的ベネフィットも証明されていない。

(大阪公立大学大学院医学研究科女性生涯医学 田原三枝 抄)